

---

# イレブンナイン

向日アオイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イレブンナイン

### 【Nコード】

N6908A

### 【作者名】

向日アオイ

### 【あらすじ】

少年、志筑と少女、こより。二人の周りは、彼らの 同族 に溢れている。生まれた瞬間から、未来を決められた 対魔班 たちの  
思いとは？彼らは、果たして運命を打ち破ることができるのか？

0 0 0 : l a l a l a . . .

涼しげな歌声を頼りにし、彼は無意識に公園へと足を運んでいた。

l a l a l a . . .

歌詞のない、単調な歌であった。空を白ます朝日の真下、彼は歌声の主を探す。滑り台の下を抜け、そのまま急上昇。一陣の風となつて砂塵を舞わせた頃には、もうジャングルジムの上空で目標を発見している。

(見ツケタ……)

彼の通つた入り口から見えて一番奥、砂場の隣にはベンチが設けられていた。他の遊具と合わせてか、パステルカラーに染色された可愛らしいベンチである。そして、そのベンチの上にもまたパステルカラーの可愛らしい少女が座っていた。

パステルカラーの。

少女。

彼は、先ほどとは逆に急降下。そのままの勢いで駆けると彼が同化した空気が風を作り出す。そのままそれは彼と共に少女へ向かい、少女の長い髪を軽く掻き上げた。

灰色の髪が、ふわりとなびく。

そして、彼はそれを見た。少女のうなじに、確かに。

アクアマリンの宝石が埋め込まれている、その様を。

(フ、ハハッ……)

どこからともなく笑いが込み上げる。彼は大声で笑ってしまいたかった。しかし、それは不可能なことである。

何故なら、彼は今、空気であつた。

彼は空気と 同化 しているのであつた。

空気には、口もなければ喉もない。声が出せないのは当然で、そんな状態で周りに聞こえる笑い声を上げられるはずもなかった。

la la la . . .

何も知らないのであろう。少女は歌い続けていた。先ほど垣間見たアクアマリンの宝石のように、澄みきつた歌声である。今度は自然の風に、灰色の髪が再び揺れる。何やら楽しそうに、宝石と同色である空色の瞳は細められていた。

(ナント、美シイ……)

髪の色に、瞳の色。

それぞれが、ここまで宝石に影響された 対魔班 を、彼は今まで見たことがあつただろうか。

(コレコソガ、我ノ欲スル最大ノ力……)

無意識であつた。彼は徐々に少女へと近付き、触れようとする。

(我ヲ……、帝 へ導ク力……)

そして、触れるその直前で、

彼の動きはぴたりと止まつた。

la la la . . .

少女の歌声は、単調に同じメロディを繰り返す。終わりを知らない、永遠の歌。

(何ト……、言ウコトダ……)

彼は思わず呆然と立ち尽くした(空気なのでその場に立てるはずももちろんないのだが)。ありえもしない事実が目の前で歌っていた。

（コノ娘、迷イヲ、持タヌノカ……？）

触れる直前にわずかに触れた少女の心。そこには、彼の入り込む隙間など、少したりとも存在していなかった。

（何ト言ウコトダ……）

これでは……、同化 できないではないか。もったいない……、何と、もったいないのであるう。

（ドウニカシテ、手二入レラレヌモノダロウカ……）

彼の思考はそこまで行き着き、しかし……、案が出ない。

ドウニカシテ。

ドウニカ ドウニカ ドウニカ 欲シイ 欲シイ コノ娘ガ

！！

1 a . . .

途端。

歌声がやんだ。

（ナツ……）

それは、あまりにも突然のことであつた。彼は思わず慌て、まさか自らの存在が見つかつてしまったのではとろたえた。

しかし、彼をさらに驚かせたのは少女の次の言葉である。

「そこで何をしているんです？」

思わず、身の毛がよだつを感じた。いや、正確には今の彼には身もなければ毛もないのだが、それだけの恐怖を確かに感じたのだ。

（見ツカッタツ……！）

彼は覚悟を決めかけた。同化を見破られてはおしまいである。しかし、決めかけた、その瞬間に

「早く入ってきたらどうです、悠希くん」

少女の口から、またも思わぬ言葉が飛び出した。

……悠希くん？

（ナツ……？）

混乱する 彼のことなど全くお構いなしに、すつくと少女は立ち上がると、入り口の方へ大きく手を振る。

そこで 彼はようやく気付いた。なるほど、こんな朝早くに、ただ歌を歌いに公園へ来たのではあるまい。

そうか。……そう言うことが。

（待ち合わせ……）

少し遅れて 彼は少女の向く方へ振り返る。そして、にたりと笑った（つもりになった）。

だいぶ遠いが、それでも解る陰湿っぷり。何とまあ、この少女とは正反対なほどに心に隙間を持った少年が、そこには立っていた。

一氣に希望が見えた。それを確かに 彼は感じた。

少年は、やれやれ、とでも言いたげに溜め息を吐き、そのまま気だるそうに歩いてきた。少女の隣に少年が並ぶと、少女は、

「遅いですよ。三十分も待ちました」

につこりと、輝かんばかりの笑顔で言った。少年が、溜め息を吐く。

「お前が早すぎるんだろ。まだ五分前だ」

「はあ。五分前行動とはまた……。まったく、どこの小学生ですか。女の子を待たせないように先の先を見て行動するのが立派な男の子ってものですよ？」

「……」

呆れつつも、諭すような少女の言葉。少年は再び溜め息を吐く。相手が反論しないのを見るや否や、そのくらいのタイミングで、少女は一氣にまくし立てた。

「大体ですなつ、悠希くんには乙女心つてものが解ってないんですよ！ 普通、男の子とお出かけするときの女の子と言うのは、多少なりとも張り切って、早めに家を出るものなんです！ それを見越して、自分が待つのも気にせず約束の時間くらい前には――！」

くどくどくどくど。

(サテ……)

彼はもう、少女と少年のやり取りに興味など示していなかった。ただ、二人の姿だけをまじまじと見つめる。

灰色の髪に、空色の瞳を持つ少女。歳は、十代半ばと言ったところか。

そして、同じく十代半ばくらいの少年。焦げ茶の髪に、同色の瞳。……宝石、は？

(……アソコカ)

彼の視線は、少年の右腕へ移った。黒い、レザーのリストバンド。手首につけられたそれは、宝石を隠すものだと思われた。

(取リアエズ、でーたヲ拝見サセテモラウカ)

そして

「ひゃ!？」

「!」

彼は、猛スピードで二人の間を駆け抜けた。強風に二人の会話が止まる。

ピッ ピッ

二つの電子音。これは多分、彼にのみ聞こえたことであろう。彼が止まるとそこはすでに公園の入り口で、彼はその場でデータを開封し始める。

『DATA LOADING . . . . . LOADING . . .  
. . . . .』

ピッ

『NAME . . . 悠希志筑 JUEL . . . opal  
AGE . . . 15 ID . . . 324322 - Y』

(ユウキ、シヅキ……)

……opal。オパールか。アクアマリンじゃないと言うことは、あの少年の方なのだろう。

（おばーるデ、アノ髪ト腫……）

まあ、つまりは。

あの少女の方が価値がある。

DATA LOADING . . . . . LOADING . . . . .  
『 . . . 』

彼は残ったもう一つのデータに手をつけた。価値のある、少女のデータ。

「あーもうっ、髪がパサパサですっ。悠希くんのせいですよっ！」

少女が怒鳴るように言う。パサパサ、と言うのも、先ほどの強風による砂埃が原因であろう。

「おれのせいはないだろう。風に言え、風に」

正論である。少年 志筑はクセなのか、また溜め息を吐いている。

「知ったことじゃないですよ！ 悠希くんさえ遅刻しなければ、こうはならなかったんです！」

「遅刻した覚えはないんだが……」

志筑はまた溜め息。少女も、つられるように溜め息。そして、続けて言った。

「とにかく、行きますよ。唯さんたちが待っているかもしれません」

そして、さっさと歩き出す。数歩歩いて振り返ると、

「ほら悠希くん、早く！」

にこりと笑って手招きをした。

「……」

はあ。

溜め息。志筑の溜め息は、これで何回目だろうか。マイペースに歩き出し、志筑は少女の後を追う。



ピッ

ほぼ同時に、データの開封が完了した。彼は、その隅々まで、目を通す。

「遅いですよっ、悠希くん！」

跳ねるように、少女は公園を飛び出した。また振り返り、少年を待つ。

『NAME・・・水島こより JUEL・・・aquamari  
ne

AGE・・・15 ID・・・258592-M』

少女 こよりは、灰色の長髪を揺らしつつ、志筑を待っていた。

++++

サテ。

基本情報八揃ッタガ、マダでーたガ足りヌヨウダ。  
シバラク、観察サセテモラウ力……。

志筑たちの住む小さな町から、バス、電車と乗り継いでおよそ一時間。

そこは、のどかな町とは正反対の、いわば都会であつた。

県庁所在地の真ん中、本当に、県庁の所在するその地域。デパートもあれば、カラオケ、その他の量販店、何でもかんでも立ち並び。広々としたメインストリートを横切る、広々とした横断的歩道を二人は歩いていた。

「あ！ 次はアイスを食べましょう！」

「……」

限りなく、正反対のテンションで。

志筑は深々と溜め息を吐いた。朝ここに着いてから、朝ご飯だと言って超有名ハンバーガーショップにてハンバーガーとシェイクとフライドポテトを購入し、その場で食べたばかりなのだ。いや、それだけなら構わない。問題はこの女、先ほど美味しそうだと言って、クレープやらワッフルやらをとて楽しそうに咀嚼していたのだった。

志筑のお金で。

そう、最大の問題はそこだ。買うぶんには何も文句は言わないが、この女、先ほどから何かと志筑に請求してくる。

それは、何故か。

（女の子の夢、とか言ってくるんだろうな……）

伊達に、少女と付き合い始めて十数年生きてない。相手の言いそうなことも予想がつく。

……が、そんなことができて毛まったく嬉しくない。それが現状。

「悠希くん！ 抹茶とかなら、食べられるんじゃないですか？」

横断的歩道を渡り終えると、そこは大型デパートの真下である。

その、大きな入り口の前で立ち止まり、こよりはくるりと振り返った。とても楽しそうな笑顔である。

「……遠慮する」

「えー！ 何ですかっ？ どうしてですか！？ 美味しいですよ、アイス……」

「別に、おれが食べなくても。お前だけ食べてればそれでいいだろ」「よくないです！」

笑顔も一転、ここまでくると、怒るを通り越してかなり拗ねた顔になる。会話の流れの関係で、コロコロと表情が変わるのがこの少女だ。志筑はまた溜め息を吐き、

「おれは、腹は空いてない」

結構さりと云つてのけた。

こよりが、一層ぶすつと顔を歪める。まあ、予想の範囲内だ。

「……じゃあ、いいです」

しかし、これは予想外だった。まさか諦めるとは思っていなかったのだ。少し哀しそうに溜め息を吐いてから、くると店内へ身体を向ける。

嫌な予感がした。

何故、諦めたのに店内へ向くのか。

「じゃあ……、ゲームセンターへ行きましょう！ ここの七階に、新しくできたらしいですよ！」

再び、くるん。振り向いた顔は、先ほど以上の笑顔である。

にこにこ。

にこにこ、にこにこ。

にこにこ、にこにこ、にこにこ。

「……解ったよ」

はあ、と志筑は溜め息を吐く。何かに敗北した気がしてならない、そんな瞬間であった。

「わあい！ 悠希くん、ありがとうございます！」

パン、とこよりは手を打ち鳴らした。上機嫌である。そこまで

喜ばしいことだったのだろうか。よく解らない。

志筑は、珍しく先導を切る形でデパート内に踏み込んだ。ひやりとした冷気が肌を撫でる。そう言えば、もうすぐ夏かと頭の中でぼんやり考え、自らの季節感のなさに溜め息を吐く。

こよりが隣に並んだ。

「七階ですよ？」

「解ってる」

短い会話のうちに、志筑は近くにあるエスカレーターへと踏み込んだ。もちろん、上階へ向かうエスカレーターである。こよりもあとに続いた。

二階、生活品のコーナー。

三階、衣料品のコーナー。

四階、本とCDのコーナー。

五階、玩具と文具のコーナー。

六階、雑貨のコーナー。

七階、ゲームのコーナー。

到着。

エスカレーターを降りた瞬間、他のフロアよりも、このフロアの温度が一、二度高い気がした。

「悠希くんっ、早く！」

こよりは本当に上機嫌である。弾むように、アーケードゲームのコーナーへと入り込む。志筑も渋々付き合っつて、少女のあとを追いかけた。

格闘ゲームに、音楽ゲーム。レーシングゲームや射撃ゲームなんてものもあれば、誰が遊ぶのかもよく解らない、アニメのキャラクターのゲームもある。

適当に眺め回しただけだが、一言にアーケードと言っても様々である。様々なゲームへ集まる人々を見ながら、何がそんなに楽しいのかと首を傾げた。

（……あいつは……？）

再び辺りを見回す。一度、二度、三度。灰色の頭は見当たらない。奥へ行った可能性があると、仕方なく志筑も足を運ぶ。

きよろきよろと、見回しながら店内を歩く。いない。壁に突き当たったので振り返り、再び入り口へ。まだ見つからないので、どうするか、と考えたところで、アーケードのコーナーからクレーンのコーナーへと移動する、灰色の髪の後ろ姿が見えた。

(……いた)

追いかけよう、と思ったが、嫌な予感が足を止めた。クレーンゲーム。こよりの性格を考えても、嫌な予感がない方がおかしい気がする。

(……九時二十六分……)

壁の時計へと、視線を上げて溜め息。そして、結局こよりを探しに歩み出す。同じ形のクレーンゲーム本体が並ぶその中を、灰色の髪だけを探して進んだ。

(……いた)

こよりは、かなりあっさりが見つかった。じっと、恨めしそうにとある一つを眺めている。

嫌な予感、倍増。

話しかけるか、否か。本気で悩んだ。しかし、

「あ！ 悠希くん！」

あちらから、こちらに話しかけてきた。

「これ！ 見てくださいよ！」

見るだけじゃダメなんだろうかと、溜め息を吐きつつ志筑はその機体へ、

歩み寄って、立ち止まった。

隣では、こよりがにこにここと、何かを待っている。……この場合、気の利いた反応なのだろう、が。

「何だこれは……」

志筑には、呆れてそんな声を漏らすのが精一杯であった。機体の中には、ぬいぐるみ。クマや、イヌや、ウサギや、ネコ。そこま

では、まだいい。

カエル。

まあ、これもまだいい。

色が、すべて黒と赤の二色使い。

これは……、さすがに問題であろう。

「クマさん、可愛くないですか？」

「……」

返す言葉もない。

「悠希くん」

こよりが、につこりと名前を呼んだ。嫌な予感が、二倍くらいの規模で現実になるのを感じる。

「クマさん、取ってくださいか？」

…… やっぱり。

呆れた溜め息と同時に顔がひきつるのが解る。堅い動きで頷くと、ありがとうございますっ、と最上級の笑顔が返ってきた。

どうやら、今日で一番嬉しい出来事だったらしい。

もう、溜め息すら吐く気になれずに志筑は黙って財布から硬貨を一枚取り出した。あれだけ奢ったと言うのに、まだ財布には大層な金額が入っている。これは、志筑の物欲のなさが作り出した言わば産物であった。

チャリン。金属質な音が手元で鳴った。じつと目標を眺め、ボタンの位置も確認。慎重に、ボタンを押しにかかる。

まずは左。そして、奥。

クレーンの爪が、クマの身体をがちり掴み、そして、がたんっ。

「わ！　すごいですっ、悠希くん！！」

こよりが素早く出口から人形を取り出した。赤と黒のクマ。こよりとは、まるで正反対な色合いだ。

「これ、もらってもいいですか！？」

「おれはいらない」

「ありがとうございますっ！」

はしゃぎすぎて少し赤くなった顔が、満面の笑みで辞儀をする。深々と、よほど嬉しかったらしいなと考えて、

「時間だ。行くぞ」

思い出したように呟き、早々と歩き出した。

「えっ、ちょ、悠希くん!!」

こよりの慌てた声が聞こえる。パタパタと、足音。こちらに追いつくと、ブスツと拗ねた口調で呟く。

「何も、置いてくことないじゃないですかっ」

「時間切れだ。今から行かないと間に合わない」

「……え、もうそんな時間ですか？」

こよりは慌てて自らの携帯電話を取り出し確認し出す。白い携帯電話。桃色で、質素なストラップがついている。

「三十分……」

「少し、急いだ方がいいな……」

こよりの言葉を聞いて、志筑は素直にそう思う。

「そうですね」

こよりも首肯した。

「唯さんを待たせてはいけませんからね」

「ああ」

頷き、下りのエスカレーターに乗り込む。そこで、ようやくこよりの言葉に疑問を持った。

唯さんを待たせては

これから会うのは、神崎唯と和泉俊樹。二人だ。そこで、敢えて『唯さん』。さて、意味はあるのか？

（……考えるまでもない、か）

そう。考える必要は皆無であった。

俊樹は遅刻の常習犯。まあ、学校でさえそうなのだから、プライベートがそうでない可能性など、低くしか考えられなかった。

それに対して、唯は待ち合わせには早めに到着したがるタイプ。

まあ、こよりの限定も当然か、と思える。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6908a/>

---

イレブンナイン

2010年12月5日14時57分発行